

アウシュヴィッツ平和の旅に参加して～過去の過ちから学ぶことの大切さ～

佐賀市職員労働組合 内田尚子

○なぜ労働組合が平和への取り組みを行うのか

労働組合は私たち労働者を守るために活動をしています。それは、戦争のない平和な状態だからこそ取り組めることです。もし、戦争が起きてしまったら、私たちは公務員として戦争に加担するような仕事、軍備を優先させたり、住民を戦場へ送る手続きをしなければいけません。平和でないと、人権も、労働も、生活も維持することはできません。そのために、組合は平和のための取り組みを行っています。

○平和の旅について

この旅では、第二次世界大戦当時の世界情勢やファシズムのゆがんだ思想、ヒトラーが政権を握った後、どのような政策を行ったのか、強制収容所で行われた非人道的行為などの歴史の一端に触れました。現在でも、世界では戦争が起こっています！ヒトラーが、ナチス・ドイツが、ドイツ国民が、犯した過ちから、私たちは学ばなければいけないことがあると実感しました。

ドイツは第一次世界大戦で敗戦国となり、領土を奪われ、莫大な賠償金を支払わなければいけません。さらに、1929年の世界恐慌によって不況に陥り、失業者が急増していました。人々の社会に対する不満が募っていた、そのような中で登場したのがナチス党首のヒトラーでした。ヒトラーはドイツ民族の優秀さを説き、失っていた自信と誇りを取り戻すための政策を打ち出して、ユダヤ人の排除などを唱えました。ヨーロッパでは、ヒトラー以前からもユダヤ人は宗教的な理由などで迫害・差別の対象とされていて、妬みなどの負の感情がありました。ヒトラーはそれを利用し、社会の不満、失業や不況の原因を『すべてユダヤ人のせいだ』とすることで国民の支持を集めました。迫害はどんどん加速していき、ユダヤ人から様々な権利を取り上げ、遂には絶滅政策へとつながっていくのです。

ナチスの当初の支持率は約3分の1程度でしたが連立により政権を握り、1933年、ヒトラーは民主的に首相になりました。これは、人々の無関心を利用して、多数派を巻き込むことに成功したと言えます。多数派というのは、賛成も反対もしない人たち、つまり傍観者のことです。反対の声を上げた人たちもいましたが徹底的に弾圧され、強制収容所に収容していきました。ヒトラー内閣発足後、1年もたたないうちに敵対する議員を逮捕・拘禁し、そして、全権委任法(民族および国家の危難を除去するための法律)を成立させ、ナチス党以外の政党を禁止しました。ナチスは議会を経由せず無制限に法律を作れることで独裁を可能としたのです。



ビルケナウへと続く線路

ヒトラーが権力を握ってから第二次世界大戦が終結する1945年までの間にユダヤ人や政治犯と言われる人の強制収容や虐殺などの犠牲者は600万人と言われています。

○アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所

1940年に開設されたアウシュヴィッツ強制収容所は、ドイツが占領していたポーランドに作った収容所です。1941年秋には3キロ離れた場所にアウシュヴィッツ第二収容所ビルケナウの建設を始めました。

アウシュヴィッツ強制収容所の収容者の多くはユダヤ人が占めており、第二次世界大戦下、ヨーロッパの各地から何十万人というユダヤ人がこの強制収容所に送られてきました。貨物列車にぎゅうぎゅうに詰め込まれて、何十時間も立ったまま、どこに連れられていくのか、何が起こるのかも知らされず、荷物のように運ばれたのです。

収容所に到着するとすべての所持品が取り上げられ、労働力にならないと判断された人、特に女性や子ども、病人や老人は収容もされずに、「シャワーを浴びる」という嘘をつかれ、そのままガス室に送られました。到着してすぐに殺されてしまった人たちは、運ばれてきた人たちの80%になるそうです。



ユダヤ人たちが乗せられた貨車

また、ガス室送りにはならなかった残りの20%の人々に課せられた強制労働は非常に過酷なものでした。与えられる食料は人間が生きていくためには明らかに不十分であったし、不衛生な環境、冬には零下何十度にもなる気候の中で体力の低下や、チフスなどの病気で死んでいく人も少なくありませんでした。

また、一部の収容者は、ガス室への誘導作業や死体の焼却をさせられました。ユダヤ人がユダヤ人の虐殺を行う、差別と分断による支配でした。死を目の前にした極限状態の人間は、「自分さえよければ、他人はどうなってもいい」という精神状態となり、自分が生き残るために手段を択ばず命じられるままに働いていたのです。戦争は、個人としての権利も人間性も徹底的に喪失させ、無関心にさせてしまうものなのだと感じました。

○戦争の歴史を次世代につなげる

このような歴史は過去の出来事であるだけでなく、現在、そして未来へつながっています。ロシアがウクライナに軍事侵攻を開始してからもう3年が経っているのに、戦争終結は見えぬ長期化しています。また、イスラエル(ユダヤ人の国家)とパレスチナのガザ地区での戦闘も長期化しており、人道状況は深刻化しています。ガザ地区では、イスラエル軍が女性や子どもを中心に殲滅作戦(全滅させる作戦)を行い、多くの人たちが殺されています。かつて、ナチス・ドイツがユダヤ人に行ったことをユダヤ人がアラブ人に行っているのです。

日本でも、政府は台湾や南西諸島での有事の可能性を口実に「戦争のできる国づくり」へと歩みを進めています。一部の政治家、一部の企業の方針が優先され、平和に暮らし、普通に働いて生活できるだけの賃金を得るという当たり前のことがかつてないほどの危険にさらされています。自分の意見が言えない、国に従わなければならない、これでは、ナチス・ドイツと同じではないでしょうか。人間らしく働き、生活していくためには、私たち一人ひとりが、無関心・傍観者にならず、平和を守る取り組みを続けていく必要があります。取り返しがつかない事態になってしまわないために、きちんと真実を学び、声を上げ、そのことを次の世代に伝えていく必要を実感しています。

会場の皆さんも、現地を訪れ、肌で感じ、平和について考えましょう。多くの人が平和について考えることで、平和の輪が広がっていきます。。